

ソーシャルワークの視点による「居場所づくり」実践の考察

－「居場所づくり」の展開過程に焦点をあてて－

○ 同志社大学大学院 氏名 佐々木 瞳 (009440)

キーワード：子ども，居場所づくり，ソーシャルワーク

1. 研究目的

子どもたちの生活を支える取り組みとして，地域における「居場所づくり」が広まっている．本研究は，それらが子どもたちにとってさらに有益な実践となるよう示唆を得ることを目的とする．「居場所づくり」の必要性には多くの人々が共感しているが，その意義は感覚的なものであり，子どもに対する明確な効果が示されているとはいえないのではないか．各地で熱心な取り組みが広がっているからこそ，そのあり方を見つめ直すとともに，子どもたちにとってより有益な実践へと発展する可能性を模索していきたい．

2. 研究の視点および方法

本研究では，文献研究を通して，「居場所づくり」の実践の展開過程，および，その効果や課題をめぐる議論を把握し，上記の研究目的に関して考察する．そこで，子どもの生活を支えるという側面に焦点を当て，ソーシャルワーク（以下，SW）の視点が求められると考えた．その視点について確認すると，たとえば「ソーシャルワーク専門職のグローバル定義」の日本語訳に「ソーシャルワークは，…人々やさまざまな構造に働きかける」と示される．ロンドンの医療 SW に携わった Z・T・ブトゥリムは SW における価値前提として，「人間尊重」，「人間の社会性」，「変化の可能性」，を挙げ（Butrym＝1986：59-63），アメリカの SW に貢献した H・M・バートレットは，専門職としての SW に関して「個人は自分自身である権利，また，必要に応じて援助や機会を用いながら自分の問題を解決していく権利をもっていると強調すること」を述べている（Bartlett＝1978：63）．これらをもとに本研究は，SW の視点として，対象となる人の存在を尊重する点，変化や成長の可能性を信じる点，本人の主体的な生活のために本人を支えるとともにその環境に働きかける点，をとらえていく．

3. 倫理的配慮

日本社会福祉学会研究倫理指針に従い，引用，学会発表，用語などに関して倫理的配慮を行った．

4. 研究結果

まず 1980 年代半ばから，不登校の子どもが安心して通い自由に活動できるような場として「フリースクール」等がつくられるようになり，それらが「居場所」と呼ばれた（住田 2003 など）．それとは別の流れとして 2004 年，文部科学省は「子どもの居場所づくり新プラン」を打ち出した．青少年の問題行動の深刻化や地域・家庭の教育力の低下等をふまえ，子どもたちが様々な活動をする場をつくり健全な発達を促すことを目的に，「地域子ども教室」が開設されていった（文部科学省 2005）．民間ではすでに 1990 年代後半から，

そのように子どもたちの自由な活動の場として青少年施設などが設けられていた（南出 2015；阿比留 2017）。そして 2000 年代半ばから、子どもの貧困問題を背景に「子ども食堂」や「学習支援」といった取り組みが広まり、それらが「居場所づくり」を掲げている。「子ども食堂」という名には本来、子どもが安心して来られる食堂という意味が込められている（湯浅 2017）。また、「学習支援」の源流は、生活保護ケースワーカーが、中学卒業後に進学も就職もしない子どもがいること、不安定就労などを経て再び生活保護につながることを問題視し、高校進学を目指して信頼関係を築きながら子どもの学習を支援した取り組みであった（田中 2015）。

このように「居場所づくり」では、単に「居る」場所ではなく、活動、交流、課題解決や発達・成長・自立といったさまざまな要素を期待するとともに、それらを通した、あるいはそれらの基盤としての、仲間・大人との信頼関係や、安心・自由など子ども自身の主観における居心地のよさが、共通して重視されてきたといえる。しかし、その実践のうえで、そこに居る人の主観として「居場所」であるかどうか疑問が生じてくることが議論されてきている（南出 2015；阿比留 2017 など）。

5. 考察

「居場所」が子どもを取り巻く環境の一部であるとすれば、その実践を SW の視点から考察することは示唆に富む。SW の視点から、「居場所づくり」ではまず個々の存在を尊重し、子どもの変化や成長を促すことが必要であるといえるが、この点はこれまでも意識されてきたとわかる。また、主体的な生活を支えるという点からは、すでに議論されているように、客観的に子どもにふさわしい場を提供するのみではなく、子ども自身がそこを「居場所」とであると感じられなければならない。さらに、子どもの生活全体をみれば、「居場所づくり」は子どもが生活する時間・場所の一部、あるいは子どもを支える社会資源の一部として位置づく。それを意識し、「居場所づくり」のみによって子どもを支えようとするのではなく、状況に応じて子どもが必要とする支援や関係性を得られるよう、子どもを取り巻く環境全体とつながりをもった実践であるべきであると考えられる。

【文献・ウェブページ】 阿比留久美（2017）「子どもの文化を生み出す『居場所』」（第 1 回）日本の子どもたちに『居場所』はあるのか? 『子どものしあわせ』794, 24-29. / Harriett M. Bartlett (1970) *The Common Base of Social Work Practice*, National Association of Social Workers. (=1978, 小松源助監訳『社会福祉実践の基盤』ミネルヴァ書房.) / 南出吉祥（2015）『居場所づくり』実践の多様な展開とその特質『社会文化研究』17, 69-90. / 文部科学省（2005）『平成 16 年度文部科学白書』 / 住田正樹（2003）「子供たちの『居場所』と対人的世界」住田正樹・南博文『子どもたちの「居場所」と対人的世界の現在』九州大学出版会, 3-20. / 田中聡子（2015）「子どもの貧困に抗うための実践」埋橋孝文・矢野裕俊編『子どもの貧困／不利／困難を考える I—理論的アプローチと各国の取組み—』ミネルヴァ書房, 119-142. / 湯浅誠（2017）『「なんとかする」子どもの貧困』角川新書. / Zofia T. Butrym (1976) *The Nature of Social Work*, The Macmillan Press. (=1986, 川田晋音監訳『ソーシャルワークとは何か』川島書店.) / 公益社団法人日本社会福祉士会「ソーシャルワーク専門職のグローバル定義」(http://www.jacsw.or.jp/06_kokusai/IFSW/files/SW_teigi_japanese.pdf, 2018.5.7)